

生活支援体制整備事業における情報収集

【社地域】

他の 2 地区に比べて面積が広く人口も多く市全体の約 50%を占めている。商店や住宅が密集している地区と農地が広がる地区があり、地区の課題や関心事がそれぞれ異なるため、中学校区ではなく、旧小学校区単位での活動が中心となっている。

①移動手段

・乗り合いタクシー「伝タク」、自主運行バス「米田ふれあい号」「福田ふくふくバス」「きよみずバス」が運行している。停留所までなかなか行けない、行きたいところや行きたい時間に行けないなどの課題があったが、デマンド型交通が始まり利便性が高まってきている。

②居場所・交流

・アパートや新宅が増え、昔から地縁の深い住民と新しく入ってきた住民とが混在している地区がある。関係性が難しい一方で、地区の歴史書を作るなど、共生のために工夫している地区もある。

・外国人人口が増え、生活スタイルの違いや、ごみの分別等の生活上の課題もあるが、交流の機会を設けるための取組を計画されている地区もある。

・戸数の少ない地区や役員の担い手不足などにより、シニアクラブ（老人クラブ）等の団体の活動継続が困難な地区もある。

・コロナ禍や担い手不足によりふれあい喫茶が終了した地域もあるが、ほとんどの地区ではサロンやまちかど体操などの活動が活発に行われている。

・小中一貫校が開校し、以前よりも学校と地域とのつながりが希薄になっている。小学校の跡地をどうするのかという課題がある。

・古民家を活用して子どもの居場所づくりを担う活動団体がいる。

③その他

・公民館の 2 階で催しをした際に階段昇降が困難である。

・自治会活動を継続するために、SNS を使って見守り・支え合い活動をしている地区がある。

・まち協の活動が盛んで、工夫して様々な取組がされている。

・社高校の生徒がボランティア活動やスマホ教室などに協力する機会があり、呼びかけができる関係性が築けている。

【滝野地域】

他の2地域に比べて夫婦2人暮らし（配偶者65歳以上）世帯が多い。また他の2地域に比べて、賃貸住宅が多く町内会・自治会活動に参加していない人が多い傾向が見受けられる。滝野地域連絡会を継続していることにより、定期的に地域の問題を話し合う場があり、地域の課題を自分事として捉えることができている。

移動販売は8年目を迎え、各地区で担当者を決めて高齢者の買い物サポートを継続している。

①移動手段

- ・住宅密集地では、道が狭く、徒歩・自転車を活用している。
- ・コミュニティバスの実証実験中であるが、公共交通は運行時間が限定されており、行きたい時に行きたい場所へ行くための移動手段がほしい。滝野地域連絡会から市へ要望を続けたこともあり、デマンド型交通の利便性が高まってきている。
- ・移動販売までの停留所まで行くための支援がほしい。

②居場所・交流

- ・賃貸住宅や新興住宅地などは、近所同士のつながりが希薄になっており、住民の情報が把握しにくい。
- ・コロナを機にサロンがなくなり外出機会が減少した地区もあるが、新たにサロンが立ち上がった地区もある。三世代交流や福祉施設と交流をもっている地区もある。
- ・シニアクラブでグランドゴルフやニュースポーツを行ったり、学校とのふれあい活動を継続的に行っている。
- ・外国人人口が増えており、生活する上での課題もある。

③移動販売の継続

- ・移動販売は定着しているが、利用者が固定化傾向にあるため、各地区の意見を参考に停留所の見直しを行った。引き続き、新たな集客のための十分な周知が必要である。

④その他

- ・ゴミ出しに困っている人がいる。（歩行に支障がある、認知症で曜日を間違える、ごみの分別ができなくなる）
- ・シニアクラブの会員の減少、役員の担い手不足
- ・60歳を過ぎても働いている人がいるため、地域活動にまで時間を割くことが難しい人もいる。

【東条地域】

地域全体で三世同居が多く、高齢者への気配りが自然と定着している。小中一貫校が開校したことで、子どもたちがスクールバスで通学するようになり、これまでの見守り活動をしてきた人の役割が減ったり、地域とのつながりが希薄になるなどの変化が見られる。他の2地域に比べて高齢化率が高く、地域活動の継続が難しい面もある。その他、商店（商業施設）が少ないことから、買い物が不便と感じている人が多いため、助け合いの活動が課題である。

①移動手段

- ・自主運行バス「とうじょうあいあいバス」が運行しているが、行きたいところや行きたい時間に行けない。

- ・まちかど体操や、集いの場への移動手段の確保が課題であったが、地元の介護事業所の送迎車の空き時間を利用して移動支援が始まった。

②居場所・交流

- ・集いの場所がある。（とどろきカフェ・楽しみ広場・ほんわかひろば・コミュニケーションマージャン・健康マージャン）

- ・新たにまちかど体操を開始した地区がある。

- ・地元の介護事業所の協力・支援（職員の派遣）があり、活動拠点が移動したものの継続的に活動できている。※コロナを機に場所の提供はなくなった。

- ・新興住宅地では若い世代が多いが、多世代交流も行っている。一方で、子どもが少なく多世代交流ができない地区もある。

- ・ボランティアグループの高齢化により活動先が限定的になったり、ボランティアグループが活動発表する場が少なくなってきた。一方で、健康をテーマにした新しいボランティアグループも立ち上がっており、参加者も多い。

③その他

- ・買い物先が少ないが、協力的な個人商店が宅配をしてくれたり、移動販売が運行を開始したことにより利便性が高まっている。

- ・別荘地では住民同士のつながりが希薄であり、住民の情報が把握しにくいこともある。

- ・高齢者の給食サービスのための調理ボランティアはやや不足しているが、民生児童委員OB会による協力が得られたため配食ボランティアは増えている。

- ・草刈りや農業の担い手不足などの課題に対して、解決に向けて熱心に取り組まれている地区もある。

- ・まちづくり協議会の活動が盛んでミニ文化祭が開催されている。

- ・児童生徒や園児を巻き込んだ活動が展開されており、学校園などに呼びかけができる良好な関係性が築けている。

【加東市全域】

①移動手段について

・地域で自主運行バスを走らせている地区や乗り合いタクシー、コミュニティバス（実証実験中）があるが、大半の方が移動手段として自家用車を利用されており、高齢になって運転ができなくなると、代替の移動手段がほとんどないため、通院、買い物、まちかど体操やサロン等の交流の場へ行けなくなるという課題があったが、デマンド型交通が始まったことで、利便性が高まっている。

②ゴミ出しについて

・ゴミ出しに困っている人がいる。（歩行に支障がある、認知症で曜日を間違える、ごみの分別ができなくなる）生活環境課を通じて地区と協議し、前日出しの許可を得て、ヘルパーによるゴミ出しをしている人がいる。今後ヘルパー確保等の課題が出てくる可能性がある。

③居場所・社会交流について

・カフェやサロン等の地域の居場所づくりが活発に行われている。しかし、公民館まで歩いていけないなど、要支援・要介護状態になるなどが原因で参加できない人も見受けられる。

④地域での助け合い活動について

・助け合い活動や有償ボランティアに関する知識を持つ人が増えてきており、介護施設等でボランティア活動を行う人もいる。困っている人と活動したい人をつなぐ仕組みづくりが今後必要である。

・独居、高齢者夫婦世帯に加え、日中独居高齢者も多く、地域での見守りや支援方法の検討が必要である。

⑤その他

・ひとり暮らし・高齢者夫婦世帯、運転免許証の返納等により買い物に困る方への支援策として、市と企業が連携協定を締結し移動販売車の運行を開始した。移動販売が、高齢者の見守りや地域のコミュニケーションの活性化の機会となるため、利用者増に向けた更なる周知が必要である。